

謝辞

栄えある聖学院創立120周年を祝う記念式典のよき日に、神に、聖学院大学パイプオルガンを奉獻できますことを、ここにお集まりの皆さまと共に、感謝したいと思います。

この後、パイプオルガン設置委員会の菊地委員長が大学パイプオルガン設置の経緯を紹介いたしますので、私からはパイプオルガンの施工業者であるガルニエ・オルガヌム有限会社さまにお礼を申し上げたいと思います。

本日の式次第にも、ガルニエ社のご紹介が記載されておりますが、ガルニエ社はフランスのオルガン制作の伝統に裏打ちされた技術を用いて、ヨーロッパの伝統的なスタイルのオルガンに加え、モダンオルガンも制作されている工房です。

この礼拝堂のパイプオルガンの外装には、檜材が使われており、オルガンの内部には、2836本のパイプが設置されています。

去る、2019年3月に私共とガルニエ社との契約が締結されましたが、その約一年後に新型コロナウイルスが世界を覆い、オルガンの設置作業は中断を余儀なくされました。2021年の9月から本チャペルに於いてオルガン組み立ての基礎工事が開始され、私もその時に、法人の創立120年に完成を見るようお願いしたいという、無理なお願いをいたしました。代表取締役のガルニエ氏が、「多分大丈夫でしょう」と、多少ひきつった笑顔で答えておられたお姿が忘れられません。

今年の3月からは、オルガンの組み立て工事が開始され、ガルニエ氏をはじめ、オルガンビルダーの方々が、大学に隣接する民家に居住して、本日の記念式典に間に合うようにと、夏休みも返上されてこの数カ月は昼夜を問わず作業を続けてこられました。このチャペルの構造に合わせ、2836本のパイプが収まるように、オルガンの設計を行い、本日、唯一無二の聖学院大学チャペルのパイプオルガンがここに完成したのです。

この記念式典直前まで、最終工程として、設置した一本一本のパイプに風を送り、音が正しい音になっているかを確認しながら、微妙な音の調整する作業をパイプに施していく、気の遠くなるような作業を丹念に続けてくださったお姿を私は忘れることはありません。

ん。

この5月にキリスト教センター主催の特別講座として「パイプオルガンって何だろう？」というテーマで、ガルニエ氏が講演をしてくださる機会がございました。

その中で、プロテスタント教会の礼拝では、礼拝の中でそこにいる会衆が全員、「神を賛美する」ことが重要な意味を持ち、礼拝で奏でられるパイプオルガンはそこに集っている会衆が歌う「コラール」即ち、「讃美歌」をリードする役目があるのだということをご説明くださいました。また、パイプオルガンは「設置」イコール「完成」ではなく、使っていく中で、オルガンの音も、外装の木材の色合いも、使い続け、時間を積み重ねていく中で変化していくものであることを教えていただきました。

その意味でも、パイプオルガンを礼拝堂の中に、お宝として鎮座させ、むやみに使わせないのではなく、礼拝において神を賛美するために、学生たちへの教育の一環として、パイプオルガンを擁する聖学院大学の地域貢献活動の一環として、このオルガンを積極的に活用していくべきであるというご示唆も頂戴いたしました。

創立記念礼拝の喜ばしい日に、見事にこの礼拝堂にパイプオルガンを完成させてくださったガルニエ社の皆様のご献身への感謝とともに、この聖学院大学の歩みの中で、このパイプオルガンを、礼拝において神を賛美するものとして、学生の教育や地域貢献のために生かし、そして何よりも神の御心にふさわしく用いていくことを誓い、ここにお礼の言葉とさせていただきます。

2023年10月28日

学校法人聖学院理事長 小池茂子